

田制佐重の教育社会学

— 研究史および生活史から —

竹村英樹（慶應義塾大学）

1. はじめに

本報告では、わが国における戦前（大正時代から、第2次大戦の前後を通して）の教育社会学者である田制佐重（たせいすけしげ）を取り上げる。わが国の教育社会学は、戦後スタートした学問分野として、一般に認知されている。そして、実際、日本の教育社会学史が論ぜられる際には、戦前にまで言及するものは決して多くない。

柴野（1986, 1990）は教育社会学は戦後出発した後発の学問ではない、と主張する。柴野（1986）はわが国の教育社会学の歴史を「明治30年代から末期までの揺籃期、それ以降大正初期から第2次大戦までの助走期、戦後の発展期に大きく3分することができる」とし、この「助走期における教育の社会学的研究は、すぐれた理論志向性を持ち、かなり豊かな個別的主题へのアプローチを示していた」と高く評価しつつ、「これらの遺産がその後の研究にほとんど引き継がれること」がなかったと、助走期と戦後の発展期との「断絶」を惜しむ。教育社会学史研究において、戦前の業績を正当に評価する作業は必要であり、主としてこの助走期に活躍した田制佐重を取り上げる本報告は、学史研究のひとつの発掘作業であると考えられる。

2. 田制に関する先行研究の評価

田制は、「主としてアメリカ教育社会学を摂取し、多くの紹介を試みた」（清水, 1956: 193）とあるように、一般にアメリカの教育社会学の紹介者として位置づけられている。また、わが国で「はじめて社会学的方法による教育研究の基礎的方向づけを設定し」、「学校を『社会的必要に依って現われたる一つの社会的設営social institution』である」と考え、学校の主要な社会的機能は、文化伝達と個人の社会化にあるとして、学校組織を中心にすえて教育と社会との関係を体系的に述べた」（柴野, 1990）という記述にあるように、体系だった教育社会学の著作を執筆しているという点で、学史上、注目されるべきであろう。

しかし、田制がどのような経緯で教育社会学を研究するようになったのかは不明であり、そもそも、どのような経歴の人物であるのかも、福永（1986）の研究を除くと明らかにされていないのが現状である。そこで、本報告では、まず、田制佐重の研究史や生活史を出来るかぎり明らかにすることを目指す。

3. 田制佐重の研究史・生活史

3-1. 田制の略年譜

田制は1886（明治19）年11月25日、山形県西置賜郡添川村大字松原に生まれる。

- ・1903（明治36）年3月、山形県立米沢中学校を卒業。
- ・1907（明治40）7月、早稲田大学文学部文学科を卒業。
- ・同年12月に新潟県立高田中学校教諭に着任
- ・高田中教諭時代に、高田の呉服屋の娘、関沢つると結婚。
- ・1913（大正2）年3月に退職して上京する
- ・上京後は、早稲田大学の恩師のついで、主として大日本文明協会で、翻訳の仕事に就く
- ・住居を豊島区西巢鴨に構える。
- ・1914（大正3）年、初めての訳書が出版
- ・翌年秋より大日本文明協会編集部員。
- ・関東大震災前後より、『新訳世界教育名著叢書』（文教書院）の編集に携わる。以後、翻訳・評論・著書を多数出版している。
- ・戦災に遭い、早稲田大学学生寮（東京都保谷市）に寄宿。
- ・戦後、1946（昭和21）年5月、早稲田大学文学部講師就任。
- ・同年12月13日、教員適格審査済。
- ・1948（昭和23）年、目黒区五本木に転居。
- ・1949（昭和24）年4月より、引き続き、新制の早稲田大学第一文学部、教育学部においても講師として教育社会学を講ずる。
- ・同年、新しく発足した日本教育社会学会の評議員に就任
- ・1954（昭和29）年10月30日自宅にて脳溢血で倒れ、死去。同日付、早稲田大学講師死亡解託。11月1日、目黒の自宅で告別式。墓所は東京小平霊園。

以上のように、田制は戦前において、在野の研究者であった。戦後になって早稲田大学で教鞭をとるが非常勤講師であり、大学人としてのキャリアのウェイトは少なかった。このことが、田制についての研究がなされてこなかったひとつの理由であろう。

3-2. 田制の人生区分

田制の人生(1886~1954年)を、大まかに7つにわけて考えることができる。

- (1) 山形時代：誕生から米沢中学校卒業(1903年3月)まで
- (2) 早稲田時代：早稲田大学文学科卒業(1907年7月)まで
- (3) 中学教員時代：新潟県立高田中学校教諭(1913年3月)まで
- (4) 著述家時代Ⅰ：上京直後から大日本文明協会での最後の翻訳(1922年)頃まで
- (5) 著述家時代Ⅱ：戦前戦中最後の執筆(1942年)まで
- (6) 空白時代：終戦前後、早稲田大学講師就任(1946年5月)まで
- (7) 大学教員時代：講師就任から死亡(1954年11月)まで

田制の著述活動は、まず、大日本文明協会において翻訳家としてスタートした。大日本文明協会は、1908年に早大総長大隈重信の主唱によって設立された民間在野における啓蒙的学術文化団体であり、大正デモクラシー期における最大の出版事業をなし遂げた。

「(4)著述家時代Ⅰ」の期間は、文明協会において10冊の翻訳書を手掛けているが、すべてが、教育社会学関連のものではない。むしろ、翻訳作業の途中で、キョウ『教育と社会』に出会い、その著書を通じてJ.デュイを知り、1918年にはDemocracy and Education(1916)を翻案している。田制の教育(社会学)研究のスタートには、キョウ/デュイとの出会いが重要なきっかけとなっている。

「(5)著述家時代Ⅱ」は、文明協会の翻訳の仕事から離れ、著述へとウェイトが移る時期である。次にあげるように、この時期に教育社会学関連の6冊の単著を執筆している。また、新訳世界教育名著叢書の編集に携わるなど、欧米の教育思潮の紹介に従事している。

3-3. 田制の教育社会学関連著作

- 1921『晩近思潮学校教育の社会化』文教書院
1922『教育的社会学』教育研究会

- 1928『教育社会学の思潮』甲子社書房
1931『教育社会学講話』甲子社書房
1932『教育的社会学』甲子社書房
1937『教育的社会学』モナス
1952『教育社会学概論』文徳社
1976『教育社会学』(三浦惟成と共著)和広出版

さて、上の8冊の著書のうち、戦後の2冊は、戦前のものを稿本としている。1976年和広出版は、1937年モナスとほぼ同じであり、1952年文徳社は1921年文教書院と同じ記述が多々見られる。若干の補足を除けば、戦後著作は戦前の焼直しといえる。

また、1921年文教書院はロビン『社会的設営としての学校一名社会教育研究入門』に多くを依っており、1922年教育研究会はキョウ『教育の社会的側面』及びミス『教育的社会学概論』をもとに書かれている。1931年『講話』及び1932年『教育的社会学』はともに「教育倫理講座」の原稿を本に編集したものであり、A.グード『社会学と教育』をもとに執筆されている。1928年『思潮』は24の雑誌論文の集成であり、体系立ってはいないが、田制の教育社会学の関心領域の広さがわかる。1937年モナスは書き下ろしであり、「初めてやや体系だった教育社会学」(序)を書いたと述べている。先行研究ではあまり参照されないが、1937年モナスが田制の教育社会学研究の到達点を示していると考えられる。

このように、田制の教育社会学書については、彼の研究史の中に位置づけて読解・解釈される必要があると考えられる。また、教育社会学以外の領域の研究や論文まで含めて、(管見のかぎり、著書36冊、翻訳29冊、論文・評論155本の業績がある)研究全体を踏まえ、田制の教育社会学を見ていくことが必要であると考えられる。

参考文献

- 福永安祥 1986 『社会学と教育』早稲田大学出版部
柴野昌山 1986 「概説 日本の社会学 教育」柴野昌山・麻生誠・池田秀男編『リ・ティクス 日本の社会学 16 教育』東大出版会
1990 「教育社会学のインテグリティ」『教育社会学研究』第47集
清水義弘 1956 『教育社会学』東大出版会